〔書　評〕

菅原範夫著『キリシタン資料を視点とする中世国語の研究』

小林千草

本書の序文は小林芳規氏の手になる。そこにおいて、氏は、「室町時代末期のキリシタン資料を核として、これと時代の上で前後する国内文献資料から照射して、その言語的特性を、表記・文法・語彙・文体の注目すべき事象の二・三を、それぞれ取り上げて、史的位置づけを意図しつつ解明しようとした意欲作である」と推奨しておられるが、大学院以来著者菅原氏を薫陶されて来た恩師の総評としてゆるぎない響きを持っている。

本書の構成は、この序文のあと、

序章
第一章　平仮名表記の規範
　第一節　室町時代の平仮名資料に見られる一表記法——入声音・促音表記を中心として——
　第二節　大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相
第二章　表記に反映した筆記者の特性
　第一節　梅沢本に見られる『栄花物語』の成立・転写の様相——表記・音便形の特徴を中心にして——
　第二節　『日葡辞書』の引用文におけるローマ字綴りの改変について
　第三節　キリシタン版ローマ字資料の表記と読み——ローマ字翻字者との関係から——
　第四節　国立国会図書館蔵古活字版『伊曽保物語』における文字使用の二部性
　第五節　まとめ
第三章　『平家物語』の接続詞とその継承
　第一節　延慶本『平家物語』の接続詞
　第二節　延慶本『平家物語』の地の文の展開——接続詞の用法に注目して——
　第三節　覚一本『平家物語』の接続詞
　第四節　天草版『平家物語』の接続詞
　第五節　まとめ
第四章　推量表現の変遷
　第一節　延慶本『平家物語』の「ムズ」

第二節　『太平記』の推量表現
第三節　「うず」の消長
第五章　助詞と文章表現
第一節　『太平記』における希求・懇請の言い方について――終助詞「かし」の用法を中心として――
第二節　キリシタン資料における終助詞「かし」
第三節　中止法的に用いられる助詞「し」
第六章　キリシタン資料における漢語
第一節　『コンテムツス・ムンヂ』の漢語
第二節　天草版『平家物語』と原拠本の漢語
第七章　文献の性質と言語事象
第一節　『栄花物語』の口語的側面
第二節　古鈔本『宝物集』の文章構成とその文体――最明寺本と書陵部本巻四部分とを中心にして――
第三節　『平家物語』の文末表現――覚一本と延慶本との相違について――
第四節　まとめ
終章
既発表論文との関係
あとがき
索　引

のごとくなっている。

*

本書の書名『キリシタン資料を視点とする中世国語の研究』から受けるイメージと、上記の構成（目次）とは微妙な〝ずれ〟を有している。たとえば、第七章で「対象①とした文献は直接キリシタン資料とは関わらないもの」（442頁）であるし、第六章以外は、キリシタン資料が多く第二節以降で扱われている。しかし、これらは、著者の周到な配慮と研究の軌跡のかもしだすハーモニーなのである。

つまり、第七章に関しては、その第四節まとめにおいて、①の文の後、「しかし、文献の性質に基づいて言語事象を理解しようという方法は、第六章までにおいて基本的に取って来た方法であり、言わば、第六章までに取った方法が他の文献の研究においても共通するものであるということを、筆者の方法として実践したものである」と記される背景があるのであり、梅沢本『栄花物語』・延慶本『平家物語』・『太平記』から考察に入るのも、「国内資料での言語事象を検討し、その知見の上に立って、キリシタン資料の事象を位置づけようとする方法」論（序章　16頁）、および、「一つの端的な例をキリシタン資料に見出し、それを視点として国内資料を検証する」（17頁）という方法論から来るものなのである。氏は、前者を「第一番目の方法」、後者を「第二番目の方法」とされる。本書は、これら二つの方法の絶妙なるバランスの上に成り立っている。

＊

本書は、著者の「あとがき」にもあるように、「博士（文学）の学位論文に補訂の筆を加えたもの」であり、「終章」として、各章の要約が成されている。そこで、本稿では、要約的紹介は省き、直接、内容に触れてゆくこととする。

第一章第一節（以下、一・一と略称）は、節題に「キリシタン資料」という語が見えないが、キリシタン資料の一つ『貴理師端往来』（資料Ⅰ）の平仮名表記（入声音・促音表記）から入り、「第二番目の方法」が見事に結実した形となっている。つまり、次なる調査資料である、

資料Ⅱ　金春本『花鏡』（永享九〈一四三七〉年　貫氏筆）

資料Ⅲ　広島大学文学部国語学国文学研究室蔵舞の本『あつもり』（室町末期写）

において、「『貴理師端往来』で見られた如き、「つ・徒・津」などで表記される開音節〔tu〕と、入声音・促音を「ツ」で書き分ける表記法」を検証し、「開音節の表記には仮名「つ・徒」を、閉音節の表記には「ツ」を用いるという仮名の用法上の区別がはっきりと存在していた」という結論を得、このような表記法の拡がりを、

資料Ⅳ　広島大学国語学国文学研究室蔵『天神之御本地』（書写者不詳。寛永二〈一六二五〉年写の奥書を持つ）

資料Ⅴ　東京大学文学部国語研究室蔵『和漢通用集』

で確認する。そして、「この表記法が室町時代においてひとつの有力な表記法としてあったことを見るために、少しく異なった観点から文献を検討」すべく、キリシタン資料の一つ慶長五〈一六〇〇〉年長崎版『どちりなきりしたん』（資料Ⅵ）に戻る。そこで、「七〇％以上の入声音・促音が「ツ」で表記されている」ことを再確認し、「後の時代の文献（江戸時代の文献）」（37頁）として大蔵流狂言台本の古写本虎明本と虎清本にも当たる（資料Ⅶ）。虎清本の曲数の制約もあって、共通曲数は八番と少ないのであるが、氏は、その中の二曲を対照比較することによって効率の良い結果を得られている。

(a)虎明本・虎清本を比較すると、入声音・促音の表記はよく一致する。

(b)それに反して、ヅ或いは開音節〔tu〕の表記は大きく異なる。つまり、虎明本の表記は室町時代の資料で見られたものとよく一致し、虎清本は一致するものが極端に少なくなっている。

(c)虎明本において、この入声音・促音と開音節〔tu〕との書き分けに関しては室町時代に行われていた表音仮名遣を規範としていたと考えられる。

(d)虎明自筆の『わらんべ草』に見られる表記法と比較すると、(c)の書き分けは、虎明自身の用いる通常の表記法とは異なる。

(b)～(d)の点は、第二節に深くかかわるもので、ここの主眼は、(a)の確認作業であった。

氏は、「おわりに」において、「入声音・促音など、謡曲で「呑む」「ツムル」といわれる音節の表記は開音節〔tu〕の表記とは異

なり、「ツ」の仮名で表記するという表記法」が時代的にいつまで遡って認められるかについて、正徹筆『徒然草』（永享三〈一四三一〉年写）を資料Ⅷとして調査されているが、「書き分けの有無は断言できない」（40頁）とされるものの、『花鏡』の例からして、「少なくとも永享頃には用いられた表記法である」と推定しておられる。

ロドリゲス『日本大文典』の記述、土井忠生・岩淵悦太郎・佐々木峻氏の論を契機あるいは支証として取りくみつつわかりやすく書かれているので、学部学生もこれを基準に永享前後の平仮名表記資料（古記録・書簡・和歌など）を独自に調査することも可能になった。

一・二は、大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相を論じたもので、〈第一表　虎清本狂言　平仮名表〉〈第三表　虎明本狂言　仮名表〉〈第五表『わらんべ草』仮名表〉がまた、後進のため有益である。これらの文献に日頃よく接しており、感覚的に捉えているつもりになっていた評者など、精緻な調査数値・細部分析を前に、襟を正す思いであった。

第二章がまた、面白い。表記に反映した筆記者や翻字者の特性を洗い出し、この書には何人が関わっていると割り出していくのであるから、推理小説を読む感がする。**二・一**における梅沢本『栄花物語』の成立・転写の様相の解き明かしも興味深かったが、何と言っても評者の関心のある『日葡辞書』・天草版『平家物語』『サントスの御作業』『ヒイデスの導師』『コンテムツス・ムンヂ』『スピリツアル修行』についての翻字者の人数推定（**二・二**、**二・三**）は圧巻である。評者など、こういう場合、やみくもに調査項目数を多くしないと落ちつかないタイプであるが、氏は要（かなめ）となるポイントを数項目用意され、図表処理により、ビジュアルな説得力を確保しておられる。研究方法のセンスの良さを痛感する。なお、推定人数は、本稿では明かさないことにする。本書を直接ひもといて、読み進めていくことで、学問的スリリングを味わっていただきたいからである。

二・四は、国立国会図書館蔵古活字版『伊曽保物語』における文字使用の二部性を考察・証明したもので、天草版エソポ物語との対照上よく古活字版『伊曽保物語』は使うものの翻刻本に頼りがちであった評者にとって、頂門の一針であった。国語学・日本語学を言語文化にまで拡げていった時、このようなアプローチは今後ますます必要とされるものと思う。版本となった抄物については、土井洋一・鈴木博氏などの言及があるが、評者などもとりくんでいかねばならない分野であると、あらためて感じさせる論考であった。

＊

第三章は、延慶本『平家物語』・覚一本『平家物語』における接続詞を、前者「読み本系」後者「語り本系」という特性に沿いつつ整理・分析したのち、天草版『平家物語』における接続詞にまで考察を及ぼしたものである。評者も、文語聞書抄物と口語聞書抄物との接続詞における対照を、「抄物の接続詞――その有する性格――

―」（『国語と国文学』昭和五六年五月）「景徐聞書の接続詞」（『国語語彙史の研究』三　昭和五七年五月）「文語聞書抄物の接続詞」（『国文学言語と文芸』九三号　昭和五七年七月）などを通して行なっているので、抄物の接続詞との距離を計るという観点から読み進めていった。

天草版『平家物語』より百年余り前の資料である吉田兼倶系日本書紀聞書諸本では、非音便形のソレニヨリテが、文明九年景徐聞書という口語聞書抄物に一例、兼致奥書本Ⅰ・兼致奥書本Ⅱという文語聞書抄物に一例・七例しか用例が見出せない状態からすると、天草版『平家物語』におけるソレニヨッテ一四例の使用は、たしかに、「口語的表現に用いる接続詞として注目される」（215頁）。総計一四例のうち、一三例が、前半部（巻四第四章まで）に出、残る一例が後半部に出るが、言語環境としては、喜一検校の右馬丞への語りかけの強い部分に出る二例以外は、全て平家物語の語り（地の文）の用例となる（なお、言語環境の捉え方が、氏と評者とは若干異なる）。原拠本の「サレバ」「サレバニヤ」「カカリシカバ」「故」の言い換えとしてのものが四例、残りは、口訳者ハビアン（氏は、ハビヤン表記を主体にされつつ、210頁などではハビアンを使用）が独自に加えたものである。大蔵虎明本狂言においても、「その事、目のあく程な事じやほどに、お地蔵のはからひで、ひだるうもなし、それに依てやせもせぬ物であらふ」（かはかみ　臨川書店刊『大蔵家伝之書古本能狂言』二265頁）「某が山のかみが、この間せつ〳〵いとまをくれひと申せども、御ぞんじのことく、あれがかせぐによつて、某ははう〳〵へまいりて、ゆる〳〵とあそびまらする、それによつて、中〳〵いとまを出す事はならぬと申たれは」（いしがみ　同二339～340頁）など、前文で述べた事実を受けてその事実から当然導かれる帰結を表わすものとして使われているので、同時代の他の口語文献への言及がほしかったように思う。

＊

第四章は、中世における推量表現の変遷を「ムズ」（「ウズ」）を中心に関連表現も合わせて考察したものである。日頃気にはなりつつ、なかなか手が届かぬ『太平記』の分析が興味深かった。**四・三**は、すでに諸氏の研究がある中での天草版『平家物語』の「うず」への言及であり、『狂言記』の分析をも加えて、この問題に関する現時点での整理の役目を果たしている。後学にとっても親切な章節となっているが、269頁第二表における終止形と連体形を分割する縦線が一枠分右に来ているため、初心者の中には混乱を起こす可能性がある。初出論文にあたれば解決される問題であるが、「終止形　う／うず／うずる」と「連体形　う／うずる」が分割されるのが正しい姿である。校正の難しさを思う。

同じく**四・三**のことであるが、『狂言記拾遺』の「うず」を解釈されて、

「僧の言葉には多く見られ、以下連体形の例であるが、

○さらは立越とむらふてとをらふするにて候。…たのみ申そするにて候（通円）

と見える。この僧は坂東の僧であるが、用例前半の表現は別の曲では

○さあらはきやくゑん（逆縁）なからとむらふて通ふするにて候（祐善）

とあり、これは若狭の僧である。多少の違いはあるが同様の文句は「楽阿弥」（東国の僧）、「蛸」（筑紫の僧）、「双六僧」（東国の僧）に見られる。僧、就中地方の僧の言葉に集中し、しかも固定的な表現である。丁重な言葉遣いをする僧と、その象徴的な地方の僧の言葉を特徴的に表したものと考えられる。」（280頁）

と記されるが、いかがであろうか。「通円」「祐善」「楽阿弥」「蛸」などは、大蔵流の大蔵虎明本狂言でも大蔵虎寛本狂言でも、また異流の和泉流『狂言六義』でも、候体の間狂言風の文体をとっているもので、用語として、「間」「うずる」「候」を固定的に使用して、幽玄能を真似た滑稽感をねらった曲目となっている。だとしたら、文体・曲調の問題として処理した方が安全であろう。

第五章は、終助詞「かし」の用法を中心に、『太平記』・『太平記』以前の諸作品・天草版『平家物語』・『イソポ物語』・国字本『伊曽保物語』・『サントスの御作業』・『コンテムツス・ムンヂ』などを分析したものであり、表現論的考察も随所に導入されており有益な一章となっている。ただ、**五・一**のタイトルが示すように、「希求・懇請の言い方」が対象とされ、第一表（古本説話集・保元物語・平治物語・宇治拾遺物語・平家物語・沙石集・徒然草・曽我物語・太平記・増鏡・義経記の調査結果を載せる）における「会話文におけるぞかし」の用例が看過できぬ多さを示している文献があるにかかわらず、論述上ほとんど触れる場がない。**五・二・おわりに**には、◆印を付した文献の調査結果が示され、「ぞかし」の使用は文語に限られているが、その有無を別にすると、用いられ方の特徴は口語文であるか、或いは文語文であるかという違いによるものではない事が分かる」（318頁）のごとく、やはり点線部で軽く触れるにとどまる。終助詞「ぞ」との絡みで「ぞかし」の文体的系譜を平安末期～現代まで追った評者（武蔵野書院刊『中世のことばと資料』**I**・第五章～第六章参照）としては、敬意あるいは発話者から受手への身分差など、終助詞「かし」の総体から教示を得たかったという思いが残る。

五・三は、中止法的に用いられる助詞「し」について論じ、幸若舞曲・古浄瑠璃を駆使し斬新である。

＊

第六章は、キリシタン資料における漢語を扱ったものである。まず**六・一**は、「『コンテムツス・ムンヂ』の漢語」として、同書（ローマ字本）および国字本『こんてむつすむん地』の漢語を比較考察したもので、「国字本の特定の語と対応しているローマ字本の漢語は異なり語数七六七語」（341頁）とし、対応のしかたによって四分類され、第一表・第二表や資料1～資料9が生み出されてゆく。

ローマ字本と国字本の本文対照作業だけでも労が多いのに、それを識別能力の高い分類にあてがわれ、資料1～9に整理・表示

されたことは、この資料を基礎データとして使用する者にとって、ありがたい限りである。たとえ、すぐにこの資料を基に云々する必要がなくとも、資料1～9を読んでいけば、漢語に対するやわらげとしての和語のありさま、難解な漢語とやさしい漢語、漢語間の類義語の関係、和語間の類義語の関係が見通せて、面白い。ただし、全てが数量的に扱われているので、一つ一つの対照は、自力でローマ字本・国字本に戻らなければならない。

資料7は、《両本共通の語形で対応している他に、ローマ字本が共通の語形―国字本が和語　の対応があるもの》七四語についての詳細表である。このうち、［ジュミャウ（1）―いのち（10）］をとりあげたい。凡例によると、［［　］内は「両本共通の語形と用例数」］である。評者は、この全ての対応に当たったわけではないが、たまたま、「キリシタン文学の心とことば――『こんてむつすむん地』巻一の第一（一）より」（『国文学ノート』三一号　平成六年三月）において、「たゞ命のひかりをもつべし」という国字本に対するローマ字本の本文「ただ寿命の光を持つべし」を問題とした。「Lumen vitæ」の直訳として、ローマ字本は「寿命の光」とし、国字本が「命のひかり」としていることに対して、単なる〝和らげ〟ということだけではなく、語史的現状や言語文化を加味した表現論の立場から、複層的に解釈しようと努めている。

同じく資料7に収まる［カンミ（17）―むつまし（1）・ふかし（1）］に対しても、「天の甘味・甘露・値遇・ひとしく――『こんてむつすむん地』の用語より」（『近代語研究』第十集　平成十一年十月）において、甘味・甘露にこめるキリシタン的意味合いが作品によって変化していることを指摘している。

このように、『コンテムツス・ムンヂ』『こんてむつすむん地』の漢語は、むしろ、内面的な問題を多く含有する。しかし、評者のようなやり方だと、ともすれば、全体像を見失う。そこで、これからは本書を大いに活用してゆきたいと考えている。

六・二は、天草版『平家物語』と原拠本の漢語につき、統計的処理を済ませたのち、付表として、「天草版『平家物語』と原拠本との漢語対応表」が12頁にわたって示されている。対応のしかたによって四分類された上で、アイウエオ順配列、かつ用例数も示されているので、資料活用性がきわめて高い。本節では、大枠を摑むことが先決であり、対応の細かい背景等については触れられることが少ない。たとえば、天草版『平家物語』の「不審」について、原拠本と対照させた際、原拠本の和語「おもはずげ」「ふしぎさよ」「いぶせさ」を「不審」を含む表現に変えた口訳者ハビアンの言語感覚にこそ、鎌倉時代の「不審」と室町末期の「不審」との表現差が読み取れるのである。

おそらく、著者にあっても、次なる段階として、このような内面化は用意されていると思うので、その日を心待ちにすることにしたい。

本書は、こののち、第七章をもって終了する。第七章は、**二・一**同様、鎌倉時代語資料にも精通した著者の独壇場である。調査

ポイントの設定の手際よさと論述の簡潔さに、学ぶところ大である。

以上、評者の関わる分野を小窓にして、読めば読むほど有益で奥行きのある本書を覗き見したメモを元に記した書評を閉じることにしよう。一・一には広大蔵の写本が活用されていた。また、「あとがき」には、土井忠生博士から森田武博士にバトンタッチされ、菅原氏をはじめとする「第三世代」に継承された「キリシタン資料を研究する」伝統に対する自覚と抱負が記されており、心を打つ。成果としての本書を通して、広島大学で育まれた学問の種が、さらに広く流布し、多くの実を新しく結ぶことを期待したい。

(二〇〇〇年六月三〇日発行　武蔵野書院刊　A5判　四六四ページ　本体価格一五〇〇〇円)

――成城大学短期大学部教授――

(二〇〇一年六月一二日　受理)